



# すまいるたん



第436号  
令和2年

2月25日

## 看護師つれづれ日記④ 訪問看護師のつづき 「看取り」をとおして思う

私は、訪問看護師としていろいろなご家族と出会い、患者さんの最期に立ち合

わせていただきました。

皆さんは、「看取るまで」「命を全うするまで」について、またその時の過ごし方を家族や友人、大切な方たちと話し合った事がありますか？ 最近、話題に取り上げられるようになってきましたが、なかなか話せないというのが現状のように思います。

「告知を希望されますか？」

「余命について全てを知りたいですか？」

がんセンター系の病院では入院時に「告知」アンケートが増えています。

父が癌で入院した際の入院の書類にこの文言が書かれていました。母は動揺し、その用紙を父に見せる事させ拒否しました。看護師の私でも正直衝撃を受けました。告知は書類に同意しました。父は

「全てを知りたい。余命も」と言い、告知にサインしました。病名を告げる事は患者である家族が落ち込むことが想像できるから悩みます。でも、全てを伝えたほうが、治療もケアもしやすいとも言われています。

病気や余命を知らずに、暮らしていく

事が幸せでしょうか？

「あの時言えなかったけど、本人は怖かっただろうな。だとしたら、一緒に悩んであげればよかった。一緒に怖いねって言ってあげればよかった」

「夫には言えない」となかなか伝えられずに、夫を亡くされた奥様の言葉です。

「今日か？明日か？昨日から意識がぼーつとする」とご主人は、自分の身体の変化を感じ、日々、死との恐怖と戦っていました。そのまま意識がなくなり、お亡くなりなりました。「一緒に怖いねって言ってあげればよかった」奥様の言葉が胸に響きました。

確かに、何も知らず、「治る」と信じているほうが、病気に対する過度な恐怖心もないとは思いますが、身体の変化に一番早く気付くのは本人です。「おかしいな」「嘘をつかれてるのかな」そういった不安が生じてくると思います。家族が隠しているなら知らないふりをしようと思いを抱えながら過ごしている患者さんも多いと思います。

では、告知した場合はどうでしょう。一番の利点は、「一緒に悩み、不安を分かち合える」ところだと思います。誰も経験したことのない「死」を目の前にしているのですから、身体的な苦痛よりも、患者さんが抱える「不安」「恐怖」は計り知れないものがあります。人は不安になった時

や、何かに悩んだ時、そばにいてくれる安心する存在が必要です。その時期を一緒に過ごし、聴いてもらえることで不安や恐怖を軽減します。

生きていくうちに死の話なんて！と思いますが、意識がなくなってからでは、本人の希望は聞けません。「本人はこれを望むと思います」という言葉もよく聞きますが、憶測でしかありません。そのような場合、残された家族は「本当にこれでよかったのか？」「きつと良かったんだよ」どこかで自分を納得させます。

残された家族は、生きていかなければなりません。その点では、残された人が後悔しない選択も必要ですが、何よりも、本人が何を望むのかです。

告知、余命宣告した時に、残された時間をどう過ごすか、やり残した事はないかと考えがちです。私は精神的な不安、恐怖を共有することが一番だ思っています。隠していたら、それはできません。片方は恐怖を抱え、片方は大丈夫と応援する。お互いに本音は言わない状況よりも、日頃から病気になった時の自分の希望、「延命」

「告知」「余命宣告」「最期の迎え方」について話しておく事が大切だと日々感じています。

正解はありません。残された家族が生きていくためにも、亡くなる方が、穏やかに過ごせるためにも、生きていく今こそ、最期について考える必要があると思います。

